

復活節第三主日

2018.4.15

ルカ 24・35-48

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

復活節第三主日の今日の福音は、ルカ福音書に語られている復活の主の弟子たちへの現われの場面です。この今日の福音は、先週の日曜日のミサの中で聴いたヨハネ福音書に語られている同じ場面を思い起こさせます。

先週聴いたヨハネの福音書には、二度にわたる復活の主の弟子たちへの現われの場面が語られていました。一度目の主の現れは、週の初めの日の夕方のことでした。人々を恐れて出入り口に鍵をかけて閉じこもっていた弟子たちの真ん中に、復活の主はご自分を現してくださったのでした。そして、それから八日後の週の初めの日、再び、復活の主は弟子たちの中に来てくださったのです。最初の時、他の弟子たちとその場に居合わせなかったトマスは、あれから一週間後の週の初めの日、今度こそ、復活の主との出会いを果たすことができたのです。

今日のルカ福音書に語られている復活の主の弟子たちへの現れも、週の初めの日の出来事として語られています。ルカ福音書 24 章に語られている、主の復活のあの週の初めの日の出来事を、あらためて、そこに語られているままに時間系列に従ってたどって見るとどういうことになるのでしょうか。

安息日が明けた週の初めの日の早朝、イエスを慕う婦人たちがイエスの葬られた墓に向います。そしてそこで、イエスが復活されたことを告げる天使のことばを聴いたのでした。婦人たちは弟子たちのところへ行ってそのことを告げますが、彼らには婦人たちのことばがたわ言のようにしか思えなかったので、信じようとはしなかったと語られています。ただ、その話を聴いたペトロだけは走って行って墓の中を覗いて見ると、イエスの遺体を包んだ亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰ったと語られています。これが、ルカ福音書に語られているイエスの復活の出来事の最初のシーンです。

これに続いて、ルカ福音書は、エマオに向かった二人の弟子たちへの復活の主の現われを語っています。二人の弟子がエマオに向ったのは、ちょうどこの日、すなわち、あの週の初めの日のことであったと語られています。ここで、あの週の初めの日の出来事を語るルカ福音書は、その出来事の第二幕をわたしたちに見せているように思えます。そのように言えるとするなら、それに続く、あの週の初めの日の出来事の第三幕が今日の福音の場面です。

エマオへ向う旅の途中で道連れになってくれたあの人が、復活された主であ

ると悟った二人の弟子は、その日のうちにエルサレムに取って返したのです。そして彼らが自分たちが経験したことを他の弟子たちに語っていると、その場に、復活された主はご自分を現してくださったのです。わたしたちの主イエス・キリストの復活の出来事はその全てが、安息日の明けたあの週の初めの日の出来事であると福音書はわたしたちに語っているのです。このことには、どのような意味が込められているのでしょうか。

旧約聖書の律法の掟によれば、安息日は、週の終わりの、厳格に守られるべき安息の日です。この日、天地万物の創造主である神は、創世記に語られているように、その創造のみわざを完成されて安息の日を迎えられたのです。それゆえに、神への信仰を生きる人々は、自分たちの手でなされる一切の業を慎んで、自分たちの手の業によって支えられる日々が、創造主である神の恵みによるものであることを感謝のうちに想起こすために、安息日の掟を大切に守ろうとしたのです。

聖金曜日の、安息日が始まろうとしていたあの夕暮れに、十字架から降ろされたイエスの遺体はあわただしく墓に葬られたのです。そして、あの安息日の間、十字架に架けられて死んだイエスは、この世のいのちを生きる全ての者がいずれは行き着く墓の中の安息のうちにおられたのです。けれども、この世のいのちを生きるわたしたち全ての者がいずれはそこにたどり着く墓の中の安息は、神を信じる人々が味わおうとした創造主である神の創造のみわざの完成としての安息とはいかにほど遠いものであることでしょうか。福音書がこぞって語るあの安息日の翌日の週の初めの日の出来事が起こらなかったなら、イエスの十字架の死もいずれは墓の闇の中に埋もれてしまったことでしょう。そして、わたしたちがこの地上で味わう全ての安息日の行き着く先は、墓の中の安息に終わるものであったことでしょう。

しかし、ここで今日の福音にあらためて耳を傾けなければなりません。わたしたちの主イエス・キリストは、旧約の安息日の律法の掟が目指していた、創造主である神の安息に与るいのちに満ちた真の安息への道を開くために、わたしたち全ての者が至りつく墓の中の安息を越えて、その安息日が明けた週の初めの日に、墓の中から復活されたお方として、弟子たちの中にご自分を現してくださったのです。わたしたちが集う全ての主日のミサは、そのようにして、わたしたちの主イエス・キリストがこの世界にもたらしてくださった、真の安息へ向けての新たな歩みの始まりとしての週の初めの日を祝っているのです。それゆえに、わたしたちの教会は、旧約の律法に定められた安息日に代えて、この週の初めの日を安息日と決めました。そのようにして、旧約の安息日が目指していたことは新たな出発点を獲得したのです。

旧約の安息日の掟は、自分たちの日頃の手の業を慎んで、創造主である神の恵みに心に向け、神への感謝をささげることを目指すものでした。それはあくまでこの地上に生きるわたしたちのために与えられた神の掟であったのです。けれども、この地上にあってわたしたちは決して、創造のみわざを完成されて安息された創造主である神の安息と一体となってそれを味わうことは出来ません。そのためには、御自分が創造されたこの世界への神の新たなみわざが必要だったのです。イエスの十字架こそが、わたしたち全ての者を真の安息に与らせるための、神の新たなみわざであったのです。あの十字架において、神が遣わされた神の子、わたしたちの主イエス・キリストは、この地上に生きるわたしたちの重荷の全てを一身に引き受けてくださり、わたしたちがこの地上で味わうことの出来る唯一の安息、墓の中の安息と一体となってくださったのです。けれども、それで終わったわけではありません。墓の中の安息を越えて、神のみもとにおける真の安息へとわたしたち全ての者を導くために、わたしたちの主イエス・キリストはそのお体をもって復活され、弟子たちにご自分を現してくださったのです。この地上に生きるわたしたちの安息は、この肉の体をもって味わうことの出来る安息でなければ、真の安息とはなりえません。わたしたちの主イエス・キリストは弟子たちに現してくださったその復活の体をもって、わたしたちが神のみもとで味わうことのできる真の安息のありようを示してくださったのです。

週の初めの主の日のミサに集うことによって、わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの十字架によって示された神のみわざを思い起こし、それが、わたしたちをどこに向かって招くためのものであったかを、わたしたちの信仰に基づく、真の安息への喜びに満ちた希望の予感のうちに味わうのです。

復活の主の最初の訪れの時に、その場に居合わせなかったトマスのことを思い出しましょう。わたしたちが生きるこの世の日々がどのようなものであろうとも、教会がわたしたちのために定めた主の日の安息日を心にとめ、次の週の初めの日に、トマスにご自分を現してくださった復活の主の訪れを待ち望みたいと思います。